



【リバイバルされていく教会となるためには】

説教: 鄭南哲牧師

今日の聖書本文:使徒の働き6:1-7/ 暗唱聖句: 使徒の働き6:7

(Rev.Jung nam-chul)

2014年の3月が始まりました。3月もみなさんの家庭の上にも、働いておられるすべてのことの上に神様の助けと恵みに満ちる一ヶ月となりますよう切にお祈り申し上げます。

今日の本文である使徒の働き6章は初代エルサレム教会において七人の執事が立たされる事を紹介しています。これは始めに教会の組織が作られたことであり、これをとおして教会はさらに成長しました。

教会の成長を研究する学者たちは“**教会とは敬虔な生活と組織という二つの車輪で動かされていくものであってこの二つがバランスを取っていくとき主の教会は正しく成長する教会となっていく**”と言いますが、すべてのことについてバランスをとるといことはどんなに強調しても言い過ぎではないと思います。今日のメッセージをとおして、特に再来週立たされる執事の意味をともに考えて見ながら、れからもどんな方々が我々の教会の執事として続けて立たされていけば良いのか鍵をつかむ時間となるように願っております。

1. 執事を立たせるようになった切っ掛け

本文の1節に“**そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシャ語を使うユダヤ人たちがヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。**”と書かれています。

ここで“**ギリシャ語を使うユダヤ人**”というのはB.C.721年アッシリヤの侵略によって北イスラエルが滅ぼされ、多くのイスラエル人が捕虜として引かれて行き、B.C.586年バビロンの侵略によってエルサレムが攻められ多くのイスラエル人がやはり捕虜として引かれていきました。それから今までイスラエルのユダヤ人たちは母国のイスラエルに住んでいる人たちより散らされているユダヤ人(つまり、ディアスポラ)がもっと多いのです。今日もイスラエルに約600万人が住んでいて、他国に散らされて住んでいるユダヤ人たちはおおよそ1,100-1,200万人ぐらいの約2倍ほどです。

しかし、ユダヤ人たちはあっちこち散らされて住んでいますが、どこにいても彼らの信仰と文化と伝統はしっかりと守って来てました。彼らはできれば、直接エルサレムにまで来てイスラエルの祭りを守ったり、神様に礼拝をさげたりしながら生涯の最後をエルサレムで迎えようとしたので老年にはエルサレムに戻ってくる人が多かったようです。ところが、このようにエルサレムに戻って来たユダヤ人たちはヘブル語を知らないで当時世界公用語(せかいこうようご)のようなギリシャ語を使っていたので、**ギリシャ語を使うユダヤ人**と言われ、捕虜として連れられず、イスラエルに残っていた人々はヘブル語を使っていたので、**ヘブル語を使うユダヤ人**と言われたのです。今日もエルサレムでは世界的に老人の方々が多くて夜中も救急車の音がかかり聞こえてくるようですが、当時も老年になってイスラエルに戻って来るギリシャ語を使っていたユダヤ人たちが多くいました。その人たちは当然すっからかんでなく、海外で自分の財産を処分してある程度のお金を持ってエルサレムに戻って来たはずですが、しかし、思いもしなかったことが起こったりして持って来たお金は全部なくなり、ご主人もなくなると、仕事もできない、ギリシャ派のやもめの方々は増えていて彼女らは救済の対象になることが多かったようです。彼らは死ぬときまで助けられる対象になるわけなので、ヘブル派のユダヤ人たちは“若いごろは、出て行って楽に自由に住んでたのに、何で年取ってからエルサレムに戻って来て、われらが助けないといけないんだらう！エルサレムが共同墓地かよ”と特にギリシャ派のやもめの方々を嫌われる者たちがいたわけです。

聖書で**やもめ**という言葉はいつも孤児と一緒に出てくる言葉として一番かわいそうな人の代名詞として使われています。しかし、聖書で言うやもめは女一人になったと言って全部やもめになるわけではありません。**救済の対象になるやもめになるためにはいくつかの教会では条件がありました。**つまり、

- ①世の快樂には未練がなく神様にのみ希望をおいていつも祈り、教会で奉仕する人でなければならない。
- ②子供や親戚がない人。子供や親戚がいれば教会からではなく子供や親戚に親孝行するように教える。
- ③一度だけ結婚し、夫が死んでいる人でなければならない。再婚した人は再び、夫が死んでもやもめには該当されない。
- ④仕える心がなければならない。仕えられるより他人の足を洗ってあげる思いを持ったなければならない。つまり、残りの生涯を他人のために仕えようとする人でなければならない。
- ⑤ 60歳以上。このような条件があれば教会のやもめの名簿に載せられ救済の対象になりました。今日の本文にはエルサレムの教会でやもめの名簿を書く時特にギリシャ派のやもめたちが抜けていたので、その苦情を申しあげたのではないかと予想されます。

初代エルサレムの教会はこの問題をどうやって解決しましたか？ 当時ギリシャ語を使うユダヤ人たちの中やもめたちがどのぐらいいたのかははっきり分かりませんが、当時社会的な記録などによると、ギリシャ派のやもめたちはそんなに多くなかったと思います。なのに、使徒たちは少ない人数の人々を無視しないでその問題を深刻に取り入れ、その問題を解決するために祈り、聖霊の知恵をいただいて提案をしました。

本文の2-4節です。“**そこで、十二弟子は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」**”と言いました。

初代エルサレム教会の信徒たちは自分の持ち物を売って、その代金を使徒たちの足元に置くと、使徒たちはそれぞれの必要に応じて分けてあげるのに、始めは問題ありませんでした。しかし、ますます救済すべき人々は増えて来たので、使徒たちは祈りとみことばを伝える両方の事ができなくなってきました。そんな時、ギリシャ派のやもめたちが救済からはずれたという苦情が聞こえて来

たのです。

その時、救済からはずれたやもめたちが使徒たちに行き“私たちは救済から抜けているので助けて下さい。”と言ったなら使徒たちは積極的にすぐ助けたはずでしょう。

ところが本文の1節を注意深く読んでみると、苦情を申し立てた人は救済から抜けたギリシャ派のやもめたちではなく“ギリシャ派のユダヤ人たち”でした。この意味はつまり救済からはずれたギリシャ派のやもめたちは直接使徒たちにはではなく、自分たちのギリシャ派のユダヤ人たちに苦情を言い、これを聞いたギリシャ派のユダヤ人たちはヘブルのユダヤ人たちが自分たちを差別し、無視しているのだと思って、言い出したわけです。

ギリシャ派のやもめたちは貧しかったですが、利口(りこう)な方々もたくさんいました。ギリシャ派のユダヤ人の中にも金持ちも多く、とても聖書的で、熱心な方々も多かったようです。そして、エルサレムの教会にも献身的に献金もたくさんさげた人々もやはりギリシャ派のユダヤ人だったと思わされます。このギリシャ派のユダヤ人たちにとっては、主にあつてはヘブル派もギリシャ派もなく、みんな新しくされた同じ主の者たちなのと言いながら、不公平に扱われているギリシャ派のやもめたちの申し出に当然腹をたたせたと思います。‘なぜ教会でさえも、人を外見だけで差別をするのか？これは我々が信じる福音の真理とは違うのではないか’ということでした。

実際、ギリシャ派のやもめたちとユダヤ人たちの意見は正しかったですが、やり方としてはギリシャ派とヘブル派のユダヤ人たちで分かれさせさらに教会の分裂をまねいてしまう可能性が決して高い正しい方法ではありませんでした。

それにもかかわらず、使徒たちは霊的な指導者らしく、この問題の本質を絞りつつ祈る中で、聖霊の知恵を通して“いま神様の御前で見逃してしまっていることは何であるのか、これを通して神様の御前でもっと大切にすることは何であるのか？”考えました。

我々も問題がある時、教会の本質に集中しながら、その問題を解決する一番効果的な提案が与えられるように求め、祈る事が主の知恵を頂く近道であることがここでもち一度分かるようになります。

つまり、教会が最優先にするべきことは祈ることとみことばを伝えることに専念し、執事たちを立たせてこの救済と奉仕への働きを任せるという提案でした。これに対して、5節によると、エルサレムの教会の信徒たちは使徒たちからの提案について全員が承認し、七人の執事を選びました。ここで、とても意味深い事は、我々の聖書には区分が分かりませんが、ギリシャ語の聖書で見ると、七人の執事さんたちの全員の名前を見ると、ギリシャ派のユダヤ人たちであったことです。これはギリシャ派のユダヤ人たちが苦情を言い、つぶやいたので、あなたがたの中でこの問題を解決し、主の働きに専念しなさいという神様の深い御心が含まれていることが分かります。

我々がともに覚えるべきことがあれば、初代エルサレム教会は聖霊と恵みに満ちて使徒たちの教えに従い、ともに、交わり、祈りと集まることに励み、一つの心と一つの思いとなって、自分のものとも言わないで、すべてを共用し、しるしと不思議なわざが行われ、リバイバルされる教会だったため、どの教会とも比較できないすばらしい教会でしたが、問題もありました。

これはつまり、いくらすばらしい問題がない教会はないことです。ですから、教会にはいつでも問題が生じる場合があるので、問題がないことを望まないで、問題が生じた時、どうやって解決していくのが大切であり、そのため主の教会はいつも主に祈りながら主の知恵を頂かなければならない事を学ばされます。

一言で言うと、ほかの人がやったことに対してむやみに批判したり、つぶやかないで、使徒たちに直接言いながら委ねるか、それとも、謙遜に祈りながら神様の時を待つのです。

初代エルサレム教会が主が立てられた教会の目的に従いながら、もっと多くの人々に仕えるために7人の執事を立てたように、我々のクリスチャンプレイズチャーチもこのために職分者(長老、執事)を立てようとしているのです。

2. 執事を立たせた結果

7節に“こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰にはいった。”と書かれています。

1) 教会が質的にリバイバルされました。

“執事”という言葉は“食卓で世話をする”という意味として英語で言うとWaiterです。ほかの人が楽に食事するようにと仕える人の意味です。まず、執事の役割は主の教会と使徒たちが祈りとみことばを伝える事に専念するように助けることでした。これによって神様の御言葉はますます広がります。それだけではなく、教会の様々な奉仕を執事たちが責任をもって仕えることにより、主の教会が強くなり、主の御言葉と愛によってますますリバイバルされる経験をされたのです。そして、使徒の働き8章を読んで見ると、エルサレム教会には激しい迫害が起こり、信徒たちが散らされ、執事は救済と奉仕ができなくなってしまいます。しかし、その以後、執事はますます伝道し、みことばを伝えることだけではなく、しるしと不思議なわざをも行いました。執事たちも信徒でしたが、のちには使徒たちのように教会の大切なリーダー役までされたのです。このように神様が立たせる執事はただ、奉仕だけではなく、信徒たちの中で大切なリーダーとしての役割も果たしました。主の働きのために使徒たちのように献身する主の弟子たちがますます増えただけではなく、内的にも教会が組織化され強められていたのです。

2) 教会が量的にもリバイバルされました。

内側が成長していたので、自然に量的にも大きくなっていったのです。7節に“こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰にはいった。”執事が立たされた事によって教会の問題などが解けた来たので、教会は平安の中で、量的にも弟子たちの数が増えて来ました。

我々の教会もエルサレム教会のように質的にも、量的にもリバイバルされるために執事を立てようとしています。ですから、初代教会のように1代だけでなく、二代も、三代も、続けて信仰と愛に満ちた執事たちが立たされることによってますます主の教会が強

くなくて行きますように共に来たし、共に切に祈りましょう。

3. すると、どんな人を執事として立たせるのですか。?

執事を立たせるのに、経歴や知識、お金のある人そういった人ではありませんでした。

本文の3節に“兄弟たち、あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。”と言いました。

1) 聖霊に満たされなければなりません。

なぜなら、聖霊に満たされなければ神様の御心を知ることもできず、イエス様を証することもできないからです。たとえば、イエス様の弟子の中でマタイは弟子になる前には損益(そんえき)計算は速い取税人でしたが、イエス様を証することはできませんでした。しかし、五旬節聖霊に満たされてからは素晴らしいイエス様の証人として用いられました。教会にも聖霊に満たされる人々が主の働き人になれば力ある教会となり、その教会の働きも生き生きしていくと信じます。しかし、反対に聖霊に満たされていない人々が教会の働き人になると神様の御心より世の会社運営方針など人間的な方法を先に出せるため、教会は混乱と難しさに追われると思います。

聖霊に満ちた人とはどんな人でしょうか。第一テモテ3:9に“きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人”です。ここで“きよい良心”とは“悟った真理のみことばを行おうとし、行えないことに対しては悔い改める心”です。そして、“信仰の奥義”とは我々の罪をみがわりに十字架の上で死んでくださったイエスキリストを信じ、救われ神の子とされたことを意味します。これを一言でまとめて言うとして聖霊に満ちた人とは“救われ信仰と行いが一致する人”もしくは“言葉だけではなくイエスキリストのために生き、行う人”です。ある本では“口を出さなければ、半分の成功をおさめることができる。”と書かれています。なぜなら、一般的に自分のあやまちについて弁明をしたり、ほかの人がやったことに対して非難するために言葉が多くなりますが、熱心に働く人は話す余裕すらないので、言葉がないのだという内容を読んだ事がありますが、聖霊に満ちた人も人々に言葉を多くしないで、神様に祈りで話し、主の教会において言葉を少なくし、従いながら仕えます。そのような人を長老として、執事として尊敬され立てられていくと信じます。

2) 知恵に満ちた人です。

ここでいう知恵とはこの世的な学歴や知恵ではなく、聖霊に満たされた結果、得られるきよい知恵としてほかの人を滅ぼす知恵ではなくほかの人を生かし、益を与える知恵です。なので何事でも主にあってどんな観点をもつのが大切です。たとえば、コップに水が半分あるのをみて“まだ、水が半分も残っている”とも言える人もおれば、逆に“水が半分しか残ってない”とも言える人もいます。主にあって肯定的に言うことが本文で言う知恵です。ですから、ある集まりに知恵ある人がいると、ほかの人々をほめたり、たかめたり尊重するため雰囲気もよく、すべてが順調に行きます。しかし、愚かな人は自己出張ばかり言いながら、ほかの人々を非難し、ぶつぶつ言うため、雰囲気も悪くなり、その集まりに行きたくなるためその共同体はリバイバルされません。知恵ある人が長老として、執事として選ばれるなら、その教会の雰囲気は明るくなり、人が寄ってくる教会となりますが、愚かな人が立たされると、教会の雰囲気も悪くなり信徒たちも離れてしまいます。ですから、だれか執事が立たされたら、教会の雰囲気も良くなって行くのかをともに神の知恵を頂き、知恵ある者を見極めて立てる事ができるように祈っていくべきです。

3) 称賛される人(評判のいい人)。

神様の働き人は聖霊と知恵とに満ちて、それによって人々から称賛を受ける人でなければなりません。それは単なる人に人気がある者を意味しているわけではありません。これはつまり、神様の前でも、人の前でも恥ずかしいところなく、人格的にもバランスの取れた人でなければなりません。第一テモテ3:2-12に長老と執事の資格についてとても具体的に教えて下っていますが、このような資格をととのえれば、神様や人々の前で恥ずかしくなく、人格的にもバランスの取れた人だと言えるでしょう。ご一緒に第一テモテ3:1-13を読んでみましょう。

- 1) “一人の妻の夫であり” - 独身の賜物がないかぎり人は結婚して家庭を持つ事を勧められています。
- 2) “自分を制し” - 肉体の欲望と本能に従わず、敬虔な信仰の生き方をします。
- 3) “慎み深く” - あらゆる言葉と行動に気をつけ非難されるところなくあやまちを犯しません。
- 4) “よくもてなし” - 貧しい、弱い人々に思いやりを持ってよく助けることです。
- 5) “教える能力があり” - ただ一方的に自分の考えを主張しないで、ほかの人々を良く理解し、説得させていくことです。
- 6) “酒飲みでなく” - お酒に中毒されず、楽しんではいけない意味です。
- 7) “暴力をふるわず” - 行動や言葉で人々に傷を与えない事です。
- 8) “温和で” - 聖書の真理問題でなければ、主張しないで譲ります。
- 9) “金銭に無欲で” - 神様よりこの世のことを好まないことです。
- 10) “自分の家庭をよく治め” - 子供たちが親と主の御言葉によく従うように教え、導くことです。
- 11) “高慢にならないで” - 教会の職分は使える立場なので、謙遜でなければなりません。
- 12) “二枚舌を使わず” - この人にはこう言い、あの人にはあ言わず、いつも移り変わりがなく信頼できることです。

このような人が称賛され、このような人がいる教会はかならずリバイバルされていきます。

我々の教会もとうとう一年間の職分者教育と訓練を通していよいよ3月16日総会の主日に第一代執事を任命するようになりました。どれだけ感謝なのか分かりません。誕生されたばかりのエルサレムの教会のように我々の教会もようやく内的な土台と組織を作り始めたと思います。これからも2,3代執事職分を受けるために準備している兄弟姉妹もいます。これからも執事を立てる時、御言葉にふさわしいのかどうか、慎重に祈りながら立てていきたいと思えます。そして、我々の教会に通っている兄弟姉妹みなが初代教会の七人の執事のように献身され、主のために仕える尊い信仰の人々になりますよう切にお祈り申しあげます。我々の教会にもこのような評判の良い人々がたくさんふえて、執事に立たされ、初代エルサレム教会のように神様の御言葉がますます広がっていきますよう主の御名によって祈り祝福します。アーメン！！